

見えないことが、強みになる仕事 失明した銀行員考案 「気付き役立てたい」

有料記事

2024年9月26日 16時30分



朝日放送テレビでアナウンサー向けに研修を行う岡田太丞さん（左から2人目）＝7月、大阪市福島区 

目が見えないことが働く上で強みになるビジネスをつくらうとしている銀行員がいる。始めたのは、目に障害がある人が講師を務めるコミュニケーション研修会。見えない人への説明を通して、伝える力を鍛えられるという。視覚障害者だからこそその気付きを社会に役立て、就労環境を少しでも良くしたいと願う。

7月上旬、朝日放送テレビ（大阪市）で約15人のアナウンサーが参加する研修が開かれた。アイマスクをつけた人に、配られた写真の内容を説明する。「言葉のプロ」が事細かに伝えたつもりでも、撮影時間が抜けていたりアングルが伝わらなかったり。講師を務めた視覚障害者が、分からなかった点や表現の工夫を解説していった。

研修を企画したのは、大阪府内の大手銀行に勤務する岡田太丞（おかだたいすけ）さん（59）。2003年、海外赴任中に交通事故に遭い、両目を失明した。「家族を路頭に迷わせるわけにはいかない」。約5年かけて音声読み上げソフトを使ったパソコンの操作や、白杖（はくじょう）で通勤する方法を習得し、仕事に復帰した。

その過程で、気付いた。世の中の仕事の多くは、見えることを前提に成り立っている。視覚障害者が仕事に就きたくても、見える人の働きにどこまで近づけるかが基準になり、見えないことはマイナスにしかない。「能力が高くても、見えないから採用されないのは理不尽。見えないことが強みになる仕事はないか？」

浮かんだのは、銀行での自身の経験だった。音声読み上げソフトで読み取れない資料はまわりの職員が口頭で説明してくれた。初めは説明が苦手だった職員も、岡田さんがわからないところを確認するうちに、いつの間にか伝え方が上達した。

思いついたのが、視覚障害者が先生になって、コミュニケーション能力を向上させる研修だった。2022年、公益社団法人「NEXT VISION」（神戸市）が主催する視覚障害者の就労を考えるアイデアコンテストに応募。障害を強みとする発想の転換が評価されて「価値転換賞」を受賞した。

現在は試験的に無料で研修を実施。学校やベビー用品メーカーでも開き、評判は上々だという。今後は講師役の視覚障害者向けの研修を進め、来春の有償化をめざしている。（丘文奈）

朝日新聞のデジタル版に掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.